マーク・トウェインの日本への関心
―1870 年代を中心に

髙島真理子

――Abstract

Mark Twain's interest in Japan had deepened since he enjoyed appreciating the performance of the Japanese acrobats in New York in May, 1867. Through the friendship with Edward Howard House, who in 1870 came to Japan as a foreign correspondent of the New York *Tribune*, and in 1871 became "Oyatoi" teacher of English at Daigaku Nankô in Tokyo, Twain got the information of such books as A.B. Mitford's *Tales of Old Japan* and Aimé Humbert's *Le Japon illustré*. As to the former, in his letter to David Gray in April, 1878, just before leaving for Europe, he commented Mitford's "THE FORTY-SEVEN RONINS" was better literature than *The Loyal League* with the fascinating Japanese woodcutting illustrations, which he had borrowed from Gray. As to *Le Japon illustré*, in some illustrations of *A Tramp Abroad* (1880) the influence from it can be recognized. In his library, Twain kept *The Loyal Ronins of Tamenaga Shunsui* by Shuichiro Saito and Edward Greey as well as Mitford's *Tales of Old Japan*.

はじめに

マーク・トウェインの *Roughing It*（1872）の最終章には、サンドウィッチ島（現ハワイ）での通信記者としての仕事を終え、サンフランシスコに戻りカリフォルニアやネバダでの講演後、今度は仕事ではなく楽しみとしての旅（"a pleasure journey"）で日本へ行き、西廻りで世界中を見てまわりたかったという記述がある（*RI*, p.542.）。*RI* では、彼がいつ頃から、またなぜ日本に関心を持つようになったのかについては何も述べられていないが、日本人への関心を深めた出来事は、1867 年のニューヨーク市での日本人軽業師たちの公演であったことは明らかである[(1)]。また、当時 New York *Tribune* の海外通信員として、1870 年から日本での記者活動を始める Edward Howard House（1834-1904）との交遊をとおして、トウェインは日本に関する本や記事もよく読んでいた。彼の書斎には、A.B. Mitford（1837-1916）の *Tales of Old Japan*（1871）や斎藤修一郎（1855-1910）と Edward Greey（1835-1888）の共訳による *The Loyal Ronins*（1880）が残っている[(2)]。蔵書にはないが、多くの挿絵を用い、維新直前の日本紹介に多大な貢献を果たしたといわれる Aimé Humbert（1819-1900）の *Le Japon illustré*（1870）も、フランス語で書かれていたにもかかわらず、絵画に関心が

あり、日本人軽業師の公演に強い印象を受けていた当時のトウェインはこの作品の挿絵には非常に惹きつけられたであろうと思われる。

本稿では、これらの書物やトウェインの書簡から、1860 年代末から 1870 年代における彼の日本への関心がどのようなものであったかを考察する。

1. トウェインの蔵書 *Tales of Old Japan* と David Gray（1836 -1888）への手紙に書かれた "The Loyal League" のコメント

マーク・トウェインは、家族を伴ってヨーロッパ旅行へ出かける直前の 1878 年 4 月 10 日に、*Buffalo Express* 紙の記者時代からの親しい友人である David Gray [3] に次のような手紙を書いている。

Dear David,

I had a delightful visit in Fredonia (got my baggage ~~full~~ as soon as I had any need of it), & a ~~dr~~ horrid night-trip to New York. I was so worn out that I didn't try to make my speech at the Taylor dinner, couldn't trust my memory.

I ordered the synonyms, & I think ~~w~~ you will like it. I expressed "The Loyal League" to you yesterday—a lovely story, but ~~in~~ I think that in some respects the simpler version in ~~the~~ Mitford's "Tales of Old Japan" is preferable. The present version leaves some of the dignity & most of the pathos out. . . .

I came near letting Mrs. Clemens keep that Japanese book, she was so fascinated with the cover & the pictures, but I couldn't for the life of me remember whether you particularly valued it or not; so I judged it safest to return it to you.

（破線部は引用者による）（*MTLE*, vol.3 April 10,1878）[4]

この手紙の中でトウェインは、ミットフォードの *Tales of Old Japan*（1871）の第一話 "THE FORTY-SEVEN RONINS" について、グレイから借りた "The Loyal League" は "lovely story" ではあるが、ミットフォードの「四十七士の浪人」の方が,「人生の哀感」（"pathos"）を感じさせ、「威厳」（"dignity"）のある作品で「好ましい」（"preferable"）とコメントしている。"Tales of Old Japan"に付けられたダブル・コーテーションは、当時一般に書籍であることを示す時に使われていたものであり、グレイに返すことにした "The Loyal League" もパンフレットのようなものではなく、オリビアが表紙や挿絵に大変魅了されたというところからも、明らかに本の装丁がなされたものである。一方、*Tales of Old Japan* にも日本人版画師による挿絵が施されているが、日本の昔からの伝承説話（例えば、「舌きりすずめ」、「花さか爺」、「四谷怪談」など）数十篇をとりあげ、脚注付きで紹介されている。

トウェインの手紙の言葉で注意しなくてはならないことは、トウェインは以前にすでに

読んだ話で内容もよくわかってはいるが、この第一話の題名 “THE FORTY-SEVEN RONINS” をはっきり記していないことである。それはおそらく、彼にとって、日本語の「浪人・Rônin」は記憶するのが難しかったからであろう。

トウェインの書斎に残るミットフォードの *Tales of Old Japan* の初版は、表紙「図１」からわかるように２巻本である[5]。この初版本の表紙の日本人曲芸団の綱渡りは、1867 年 5 月 17 日付でトウェインが *San Francisco Alta California* 紙へ送った帝国日本芸人一座に関する記事を彷彿とさせる。トウェイン自身のサンドウィッチ島についての講演とかちあった日本人軽業師らのニューヨーク市における曲芸団の人気は、この記事の中でトウェイン独特のトール・テイルのユーモアで綴られている[6]。トウェインがこの本を購入するに際して、表紙に引きつけられたことは間違いないであろう。

トウェインがミットフォードの初版（2 巻本）の *Tales of Old Japan* を入手した時期に関する記録は残っていない。だがそれは、初版が出版された直後であるか、少なくとも表紙が異なるものとして第二版がマクミラン社から 1874 年に出版される以前だったと思われる[7]。このことは、次の事柄をもって裏付けることができる。

まず第一に、この本の初版の案内（書評）は、当時トウェイン自身が数篇のスケッチ（Sketch）を寄稿していた雑誌 *Galaxy* の 1871 年 9 月号の新刊案内 “CURRENT LITERATURE” の冒頭に掲載され、買う、買わないは別として、トウェインがこれを読んだことは十分考えられることである[8]。

第二に、1871 年 5 月以前に、日本のハウスから、トウェインとグレイ宛に、自分が書いた日本に関する本のアメリカの出版社を見つけてほしいという手紙が送られており[9]、この依頼に答えるトウェインの 1871 年 5 月 3 日付の American Publishing Company の社長 Elisha Bliss（1822-1880）宛の手紙があることである。以下に見るように、すでにこの時点で、トウェインは日本人版画師による木版画に強い関心があったことが分かる。

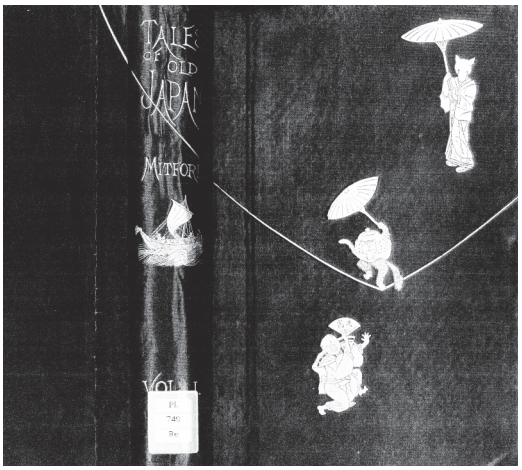

図 1-1　*Tales of Old Japan* (1871) Volume I の表紙

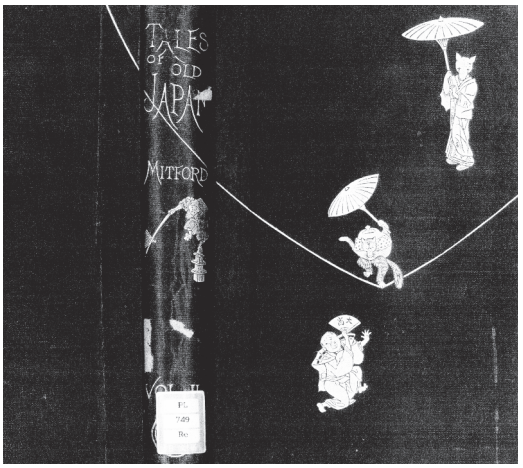

図 1-2　*Tales of Old Japan* (1871) Volume II の表紙

My friend Ned House, of the NY. Tribune, is in Japan, & is writing a book that will read bully & sell ditto. ~~If you~~ His idea of illustrating it profusely with quaint Japanese wood cuts made by native artists is a splendid feature. If you want his book let me know what royalty, & c, you will pay, and I will write him, ~~Or would you~~ If your own hands should be full you might publish it through your brother's house. I enclose the letter he wrote ~~the~~ to David Gray & me on the subject.

（破線部分：引用者）（MTL4 (1870-1871), p.388.）

第三に、明治維新直前、鎖国が解かれ軽業師たちがパリ万博めざしてアメリカやヨーロッパへ向かった頃の日本の風物、社会、風習、文化などについて書かれた、ミットフォードやアンベールの本の書名が記されている、ハウスの 1873 年 11 月 13 日付のブリス宛の手紙が残っていることである [10]。以下に見るように、ブリス宛とはいえ、ハウスの日本に関する本の出版をブリスに依頼したトウェインは、ブリスからこの手紙の情報を容易に知り得たことが推察される。

I have heard nothing from you [Bliss] in regard to my suggestion about introducing a picture (especially prepared) on Japanese paper, but I will nevertheless make inquiries as to the cost, and also as to expense if having a few genuine Japanese wood cuts make-like those Mitford's "*Tales of Old Japan.*"... Photographs of scenery, conspicuous buildings and individuals, I shall send an interesting places which have been destroyed within a year, it may be Humbert's illustrated book in Japan.

（破線部分：引用者）

手紙の冒頭でハウスは、ブリスから出版してもらうことになった和紙に刷られた挿絵付きの日本に関する自著については、その後ブリスから何の連絡もないことへの苦情を訴えている。この手紙からも、挿絵に関することで、ミットフォードの *Tales of Old Japan* の第二版が 1874 年に出版される以前、少なくともこの頃までにはトウェインは日本人による木版画、ミットフォード、そしてエメェ・アンベールの *Le Japon illustré*（1870）についても知り得ていたといえよう。

ハウスは 1870 年 7 月には、ニューヨーク・トリビューン紙の海外通信記者として日本へ向かう途上、オリビアとの結婚直後のトウェインのバッファローの新居に立ち寄っている。その時トウェインは、ベストセラーにもなった *The Innocents Abroad*（1869）を、日本への旅の途上サンフランシスコの Occidental Hotel にいるハウスに送ってほしい旨、"Be sure & send him [House] the book for I am under large obligations to him for favors done me three or four years ago in the Tribune." という手紙を出している。3〜4 年前にトウェインがハウスに恩義を感じた事とは、1867 年のニューヨーク市での自身の講演が日本人軽業師たちの公演に重なり、その後の客足が人気の日本人の公演に向かうのではないかというトウェイン

の危惧を払拭するような好意的な記事を、ニューヨーク・トリビューンという大新聞にハウスが書いてくれたことであった。ブリス宛のこの手紙には “Mr. House has just left us & gone for a sojourn in Japan.” と述べたあと、ハウスの記者としての力量を “He has long been one of the *Tribune's* ablest editorial writers, & correspondents, will write Japan letters to that paper, . . . ” （破線部：引用者）と紹介している[11]。

ハウスは 1870 年夏に来日して記者活動を続ける傍ら、1871 年 1 月には現在の東大の前身である大学南校で英語のお雇い教師に就任し、1873 年 5 月に一時帰米する際には、アメリカでの留学を希望する、二人の日本人少年、箕作佳吉（1857-1909）と小島憲之（1856-1918）を伴い、ハートフォードのトウェイン宅に滞在させてもらっている[12]。当時トウェインは、*The Gilded Age*（1873）のイギリスでの出版のため、妻オリビアを伴ってロンドンへ行く旅の準備に忙しく、彼らとの対応は宿泊させる程度のものであった。

ハウスは、二人の留学希望の箕作佳吉と小島憲之をハートフォードの高校へ編入学させたあと 1873 年秋に日本へ戻り、1874 年には日本の台湾出兵の従軍記をニューヨーク・ヘラルド紙に送っている。これについても、本にしたいため、1874 年 11 月にトウェインには再びアメリカでの出版社を探してほしい旨の手紙を書いている[13]。しかし、この時は、ハウスの従軍記はアメリカの読者受けはしないであろうと、トウェインは消極的な返事をする。この件についてもトウェインはグレイにハウスの原稿を読んでもらうことを求めている[14]。グレイは 1875 年 8 月 18 日付けの手紙でハウスの従軍記 “a large sized pamphlet of the Japanese Expedition to Formorsa” については、まだよく読んでいないという返事を送っている[15]。このように、トウェインとグレイとのやりとりをみると、ヨーロッパへ出かける直前の 1878 年 4 月に、グレイがトウェインに *The Loyal League* を見せたのも、グレイもハウスとの交遊を通じて日本への関心が深まり、この本をトウェインに紹介したかったことが推測できる。

2. アンベールの *Le Japon illustré*（1870）と *A Tramp Abroad*（1880）の挿絵

1. の冒頭で引用したトウェインのグレイへの手紙には、ニューヨークで Bayard Taylor（1825-1878）の farewell dinner に出席したことが書かれている。この時ベルリンのアメリカ大使に任命されたテイラーは、トウェインからの誘いでトウェイン一家と同じ *Holsatia* 号で 4 月 11 日にヨーロッパへ向かったのである。*Roughing It*（1872）の 20 章には、テイラーが Horace Greeley（1811-1872）にまつわるほら話を書いているという記述があるが（*RI*, p.135.）、トウェインは彼の日本に関する著作や記事を読んでいたと思われる。テイラーとの出会いは、1860 年代半ばのカリフォルニアでの記者時代の頃である[16]。トウェインの蔵書には、テイラーの著作が数冊あり、その中には 1855 年出版の *A Visit to India,China, and Japan, in the Year 1853* もある[17]。テイラーは、東洋に惹かれ、1852 年末、インドから中国へ行き、そこで日本へ向かうペリー総督の旗艦サスケハナ号に同乗して江戸末期の 1853

年開国を求めるペリーと共に来日し、その後旅行記を書いたのである。トウェインの蔵書に残るテイラーのこの本についてのトウェインのメモやコメントは見つかっていない。しかし、日本からアメリカへ帰国後のテイラーは 1871 年の *Scribner's Monthly* には "SIGHTS IN AND AROUND YEDO" と題した約 10 頁の、アンベールと彼の *Le Japon illustré* を高く評価し紹介する記事を寄稿している [18]。この記事の挿絵には、1870 年にフランスで出版されたばかりのアンベールの *Le Japon illustré* からの挿画が 9 葉も使われている。とくに 137 頁の、道端で曲芸（逆立ち）を披露する子供たちの "LITTLE MOUNTAINER'S IN THE STREETS OF YEDO." というテイラーによる英訳のキャプションがつけられた挿絵は、パリ万博を目指してニューヨークでの公演で大人気を博した軽業師たちの姿に重なり、トウェインの目に焼き付いて離れなかった挿絵だったに違いない（「図 2」参照）。

トウェインは、挿絵に多大な関心を寄せていただけでなく、自らも絵画の勉強を始めていた。このことを実証するかのように、ヨーロッパ旅行記の *A Tramp Abroad*（1880）の挿絵には他者の助けを借りずに描いた習作も含まれていると、タイトル頁に ". . . : THREE OR FOUR PICTURES MADE BY THE AUTHOR OF THIS BOOK WITHOUT OUTSIDE HELP; . . . " と謳っている。事実、*A Tramp Abroad* には、トウェイン筆と思われる数葉の挿絵「図 3」や「図 5」がある [19]。しかも、「図 3」にはキャプションに "PAINTING MY

図 2 "LITTLE MOUNTAINER'S IN THE STREETS OF YEDO."
(*Scribner's Monrhly,* p.137.)

図 3 "PAINTING MY GREAT PICTURE" (*TA*, p.82.)

GREAT PICTURE.” とある。「図 3」の右上の動物の絵や「図 5」の「図 3」で示した犬を影絵のようにマッターホルンの手前に描いているのは、アンベールの *Le Japon illustré* の挿絵（図 4、図 6）から構図のヒントを得たものと推察できる。*Le Japon illustré* では、絵馬を描く芸術家「図 4」と絵馬（“UN YEMA”）というキャプション付の「図 6」も示している。一方、トウェイン自身が「図 3」で描いたものは挿絵の右上の 3 葉の小さな絵であり、他は *TA* の挿絵画家 Walter Francis Brown（1853-1929）に描かせたものである [20]。*Le Japon illustré* はトウェインの蔵書には残っていないが、絵の勉強を兼ねての旅行中、フランスのパリのルーヴル宮で行われていた絵画展「サロン」にも滞在中の 1879 年には何度も足を運んだトウェインにとって [21]、フランス人挿絵画家による多くの挿絵が付けられた *Le Japon illustré* を、何らかの方法でブラウンに示すことはできたと思われる。トウェインはパリで絵の勉強をしていた若い美術学校生ブラウンを *TA* の主要な挿絵画家に起用し、彼にさまざまな注文や指示を与えることができたのである [22]。

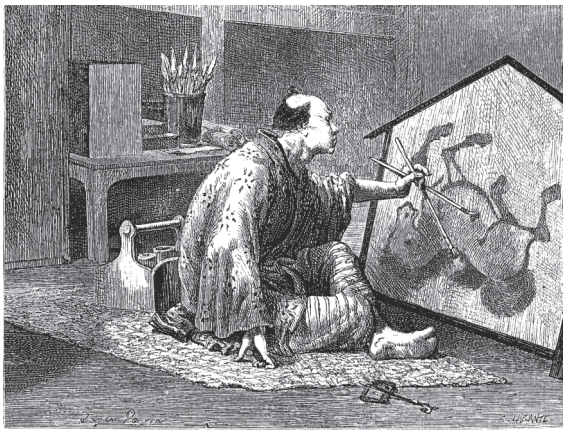

図 4　“ARTISTE JAPONAIS PEIGNANT UN YÉMA”
(*Le Japon illustré*, vol.2, p.99.)

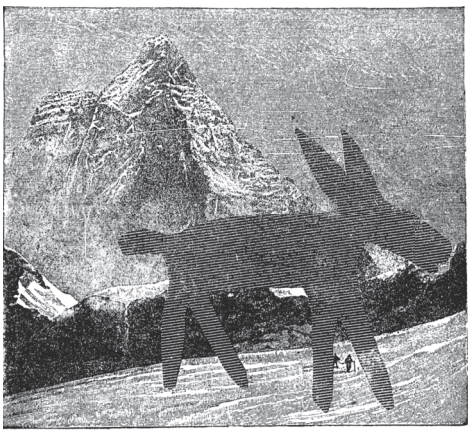

図 5　“MY PICTURE OF THE MATTERHORN”
（*TA*, p.408.）

図 6　“UN YÉMA” (*Le Japon illustré*, vol.1, p.189.)

3. *The Loyal Ronins* の斎藤修一郎（1855-1910）による “INTRODUCTION” と Edward Greey（1835-1888）の “NOTES”

グレイへの手紙の中で言及されている、ミットフォードの「四十七士の浪人」の方が *The Loyal League* より優れているとコメントしたトウェインの言辞は、2 年後の 1880 年に出版された、彼の書斎にも残る *The Loyal Ronins* には、殆ど同じ言葉づかいで “Mitford’s translation of the Ronin story is better literature than this one. S.L.C.” と書き付けられている [23]。おそらくトウェインは、300 頁近いこの本にざっと目を通して、何葉もの印象深い挿絵は、以前グレイから借りた *The Loyal League* のものと同じであると即断し、ミットフォードの “*Tales of Old Japan*” の「四十七士の浪人」と比較したことを思い出したのではないだろうか。グレイへの手紙では *The Loyal League* は彼に返すとしていることや、蔵書に書き付けた文の最後に、S.L.C. と署名まで入れている点からは、トウェインは *The Loyal League* と *The Loyal Ronins* を同一のものと捉えていたと思われる。

The Loyal Ronins（1880）は、斎藤修一郎とエドワード･グリーによる江戸時代後期の人情本作家・為永春水の『いろは文庫』にある「忠臣蔵」の話をまとめた英訳本である。*The Loyal Ronins* の共訳者・斎藤が英訳本を書こうと思いたったのは、1876 年に開催されたフィラデルフィア万博を見学したことによる。彼は万博で日本からの素晴らしい美術・工芸品の展示に接して以来、展示では伝えられない日本の芸術文化である文学・小説をぜひとも海外へ紹介したいという気持ちを抱いたのである。彼は 1877 年に一人で英訳に臨んだが、英訳が上手くなく手直しを感じていた。斎藤によれば、1880 年出版の *The Loyal Ronins* の執筆については 1879 年の夏に始めたようである。自身の翻訳の力量に自信が持てず、この年の 10 月にマサチューセッツ州マンチェスターの E.グリーの知己を得、グリーの助けを借りることにしたのである。E.グリーは親日家で日本に関する書物を出版していることも、彼を共訳者に選んだ大きな理由であろう。翌年 1880 年 1 月には、春水の『いろは文庫』からの翻訳の共訳者になってもらうという、自身の翻訳への協力を得ることができたのである [24]。『いろは文庫』の原本はマサチューセッツ州 Jamaica,Plain の Gilbert Attwood（1825-1884）[25] から譲り受けたものである（“INTRODUCTION”, pp.iv-v.）。

The Loyal Ronins は、トウェインの書斎に残っていたものであるが、書名が *Japanese Romance, The Loyal Ronins of Tamenaga Shunsui* by Shuichiro Saito and Edward Greey（1880）と斎藤らが出版したものとは少し違っている。蔵書に残る E.グリーの他の著作 *The Bear-Worshippers of Yezo and the Island of Karafuto*（1884）と *The Wonderful City of Tokio*（1882）には、それぞれ “presented by its author to Jean”、“presented by its author to Clara” という、娘の三女ジーンと次女クララへの著者からのプレゼントという言葉が記されている。一方、*The Loyal Ronins* については、この本のある頁に先に見た S.L.C.という署名付きの文が書きつけられているだけである [26]。

共訳者のE.グリーは斎藤の序文のあとの“NOTES”の中で、本文を訳出する際の苦心についてはほとんど語らず、『いろは文庫』の紹介や英訳本の挿絵や表紙などの解説を述べているだけである。*The Loyal Ronins* に付けられた渓斎英泉（1790-1848）による多くの挿絵は、グレイへの手紙の最後に、妻のオリビアが非常に気に入って返したがらないとある、日本的で強烈なインパクトを与えるものである。表紙については、表紙の後に続く頁の下に、この本の“cover”はE.グリーによってデザインされ、描かれたものとして小さく次のような記載がある。“The illustrated cover of this book was designed and drawn by Mr. Edward Greey”（破線部：引用者）。しかし、絵そのものは画風から判断して、表紙については明らかに渓斎英泉のものと推察できる（「図７、８、９」参照）。共訳者のE.グリーは挿絵の扱いについて、原本の見開きとして使われている渓斎英泉の挿絵「図７」[27]を１頁に収め、「図８」[28]のようにしたと“NOTES”のiii頁で解説している。

筆者は、トウェインはグレイから借りた *The Loyal League* を返し忘れたのではないか、と推察する。蔵書カタログの

図７　『いろは文庫 18 編 54 巻』、p5.
（国会図書館デジタルコレクション）

図８　*The Loyal Ronins*, p.４.
（宮城教育大学図書館蔵）

『*The Loyal Ronins*』（忠義浪人）の表紙、左が表、右が裏（斎藤隆氏提供）

図９　*The Loyal Ronins* の表紙と裏表紙

記載には他のE.グリーの著作と異なり、この本については出版社の名前が明記されておらず、その代わりにNew Yorkとだけ記されている。「図９」[29]の1880年出版の *The Royal Ronins* の出版社に関する記載は "G.P.PUTNAM'S SONS" のみである。トウェインがグレイに手紙を書いたのはヨーロッパへ出かける直前のことで、ヨーロッパから帰国するのは、1年半後の1879年秋であるから、返すのを忘れたとしてもそれはあり得ることである。仮にグレイに返していたら、グレイは真面目で誠実な人柄と思われるので、本が返されたら、必ずその旨の手紙を出していたはずである[30]。しかし、そのような手紙は残っていない。また、ヨーロッパから帰国後トウェインがグレイに直接手渡して返していたとしたら、それは1888年のグレイの死後、遺族によって蔵書としてきちんと保管されていたであろう。

トウェインが斎藤とE.グリーの共訳書 *The Loyal Ronins*（1880）に、ミットフォードの「四十七士の浪人」と比較したグレイへの手紙に書いたものと、ほとんど同じ言葉づかいでのコメントを書き付けただけでなく、署名まで添えていたことは、この本の渓斎英泉の挿絵もグレイから借りた *The Loyal League* の挿絵と同じものと捉えたのではないだろうか。挿絵や絵画への鋭い鑑識眼を有していたトウェインは、挿絵やその画風が異なるものであれば、二つの作品の相違を勘案したに違いない。このように考えると、トウェインが *The Loyal League* と *The Loyal Ronins* を同じ作品と捉えたことは、かえって自然な反応であったと思われるのである。

おわりに

１.の冒頭で引用した1878年4月の友人グレイへの手紙には、トウェインの日本への関心を示す「忠臣蔵」への言及がある。この手紙の存在は、グレイへの手紙を書いた1870年代後半頃において、トウェインがミットフォードの *Tales of Old Japan* の第一話「四十七士の浪人」は、グレイから借りた *The Loyal League* より文学的に優れているとコメントするほど、彼の日本への関心が深いものとなっていたことを示している。書斎に残る *The Loyal Ronins* のある頁には、グレイの手紙に書いた *The Loyal League* についてのコメントと殆ど変わらない文や署名も記されているが、ミットフォードの *Tales of Old Japan* については、メモやこの本をいつ頃入手したかの文書は残っていない。その一方、蔵書にはないアンベールの *Le Japon illustré* に関しては、*A Tramp Abroad* の中の自身が描いたという挿絵に、*Le Japon illustré* からの模倣のあとを見ることができる。

本稿では時間を遡り、1867年のニューヨーク市における帝国日本芸人一座の公演と彼らの爆発的な人気をトール・テイル風に綴ったトウェインのアルタ紙への記事を、彼の日本および日本人への関心の起点と捉え、その後彼の関心がどのように深まっていったかについて考察した。

—— Abbribiations

RI: Roughing It
MTL: Mark Twain's Letters
MTLE : Mark Twain's Letters Electronic Volume
MTP: Mark Twain Papers /Project
N&J : Mark Twain's Notebooks & Journals
SLC: Samuel Langdon Clemens
TA: A Tramp Abroad

—— 注

（1） 髙島真理子「新聞に見る帝国日本芸人一座の米国公演」和光大学『表現学部紀要』第 8 号（2007）、pp.65-69。「エドワード・ハウスとの交遊に見るマーク・トウェインの日本―1870 年代を中心に」『マーク・トウェイン研究と批評』第 7 号、日本マーク・トウェイン協会　東京：南雲堂、2008 年。TAKASHIMA, Mariko, "The Impacts of the Performances of Maguire and Risley's Imperial Japanese Troupe on Mark Twain's Lectures in San Francisco and New York in 1866 and 1867" 和光大学『表現学部紀要』第 14 号（2014）、pp.86-93。

（2） *Mark Twain's Library*, vol.1, Ed.Alan Gribben, p.277.

（3） トウェインの 1870 年のオリビアとの結婚を挟んだ時期以来、グレイは、家族ぐるみで親交を深めていたトウェインの親しい友人の一人である。彼は、*The Buffalo Daily Courant* の編集長であり、トウェインは当時ライバル紙であった *Buffalo Express* の記事を書いていた。(R. Kent Rasmussen, *Mark Twain A-Z: The Essential Reference to His Life and Writings*, pp.47., 183.)

（4） *MTLE*, vol.3, p.45.
https://www.marktwainproject.org/xtf/view?docId=letters/UCCL11402.xml;query=;searchAll=;sectionType1=;sectionType2=;sectionType3=;sectionType4=;sectionType5=;style=letter;brand=mtp#1（閲覧日:2018 年 10 月 16 日）

（5） 国際日本文化研究センター所蔵の *Tales of Old Japan*（1871）2 巻本の表紙と裏表紙。初版に関しては、表紙に全く絵のない 2 巻本も出版されている。

（6） Mark Twain, *Mark Twain's Travels with Mr. Brown*, pp.176-77.

（7） 1874 年出版の *Tales of Old Japan* の第二版には、初版とは異なる曲芸団の絵の表紙のものもある。

（8） *The Galaxy*, Volume12, Issue3 (September,1871), pp.433-35.
https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=coo.31924077725780&view=1up&seq=441（閲覧日:2018 年 7 月 10 日）

（9） ハウスからトウェインとグレイ宛の手紙の手稿は残っていない。(*MTL*.vol.4, p.389n1)

（10） ハウスからブリスへの手紙の手稿はヴァージニア大学 The Clifton Waller Barret Library, Special Collection: Edward Howard House に所蔵。

（11） 1870 年 6 月 9 日付、トウェインからブリスへの手紙。（*MTL*. vol.4, pp.148-49.）

（12） 髙島真理子「お雇い外国人エドワード・ハウスの教え子とマーク・トウェイン」和光大学『表現学部紀要』第 5 号（2004）、pp.24-26。TAKASHIMA, Mariko, "Not Twain, But Twichell;The Hartford Support-System of Edward House's Japanese Students" *Mark Twain Studies* 日本マーク・トウェイン協会（英文号）vol.2, October 2006. pp.143-44. 東京：The Japan Mark Twain Soeiety。

（13） ハウスの手紙の手稿はヴァージニア大学 The Clifton Waller Barret Library, Special Collection: Edward Howard House に所蔵。

（14） ハウスの台湾出兵に関する原稿については、ブリス宛の 1875 年 4 月 10 日の手紙にはトウェインに送られてきた原稿をブリスに送るという手紙がある（*MTL*. vol.6. p.444.）。しかしグレイがこの原稿をトウェインからいつ受けとったかについては不明である。

（15） 1875 年 8 月 18 日付のグレイからトウェインへの手紙。（手稿は MTP に所蔵）

（16） *RI*, Explanatory Notes, pp.610-11.

(17) 蔵書に残る *A Visit to India, China, and Japan, in the Year of 1853* (1855) については、1882 年出版の復刻版である。しかしトウェインは、若い頃からテイラーの詩や旅行記の愛読者であっただけでなく、テイラーとは、少なくとも 1878 年に一緒にヨーロッパへ向かう前の 1877 年に、妻のオリビアらが主催する Saturday Morning Club の講師に招き、講演後自宅に彼を招くほどの親交があった。(*MTLE* 2:11) ゲーテの Faust の英訳者でもあるテイラーは、ドイツ・ベルリンのアメリカ大使に任命される前は、ニューヨーク・トリビューン紙への寄稿もするコーネル大学のドイツ語教授であった。

(18) *Scribner's Monthly*, vol.3, Issue 2, December, 1871, pp.132-142.
https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=inu.30000011751272&view=1up&seq=1293 (閲覧日:2020 年 1 月 30 日)

(19) *A Tramp Abroad* の冒頭でも、"It was also my purpose to study art while in Europe...He[Harris]was much of an enthusiast in art as I was, and not less anxious to learn to paint.I desired to learn the German language; so did Harris." (*TA*, p.1.) とヨーロッパを見て廻る際、旅の同伴者の牧師トウィチェル (*TA* では Harris としている) 同様、ドイツ語の習得・研磨や美術を勉強したかった、と明言されている。トウェインの絵画への関心は多大であり、鑑賞もさることながら、旅へ出る数年前から絵画製作に励んでいた。彼の絵画の力量はかなりのもので、1877 年には、自身の作品を美術展へ出展するなどの活躍があり、*TA* の冒頭の絵画や美術を学ぶことへの意気込みは誇張ではない。

(20) Beverly R. David, *Mark Twain and His Illustrators Volume II (1875-1883)*, Whitston Publishing Company, New York, 2001, pp.100-26, 148-49.

(21) *N&J* vol. II (1877-1883), pp.304-05, p.304n.26.

(22) Beverly R. David, *Mark Twain and His Illustrators Volume II (1875-1883)*, pp.100-26.
なおアンベールの *Le Japon illustré* は、1874 年に *Japan and the Japanese, Illustrated* by Aimé Humbert と改題され英訳本がロンドンで出版されている。

(23) *Mark Twain's Library*, vol.1, p.277.

(24) *The Loyal Ronin*s, "INTRODUCTION", pp.iv-v.

(25) アトウッドは斎藤の序文にあるようにボストン近郊に住んでおり、当時アメリカで貸費留学生として勉強する留学生に、日本から送られてきた正貨を学生たちにドル紙幣として渡す仲買人の仕事もしていた。

当時ハーヴァード大学ロースクールの留学生であった金子堅太郎 (1852-1942) もフィラデルフィア万博に感銘を受け、その後 W. D. Howells(1837-1920) からの依頼に答えて、為永春水と同時代の人情本作家・曲三人の『娘節用』の英訳抄 "Mosumè Set's Yo; Woman's Sacrifice" を書いたのである。これは 1878 年の *Atlantic Monthly* 誌 7 月号に掲載された。金子の「懐旧録」には、「此避暑 [1877 年夏] の慰みとして、ハーバート修學中、ハウエルに約束したる娘節用 (日本の小説) の英文抄譯に著手す。是は、ハーバート大学修學中、ある晩ハウエルと會談したる際、ハウエルが日本にも小説ありや問ふ。余、答て曰く、日本も歐米各國の如く種々の小説あり。ハウエル曰く、然らば、一小説を抄譯して、其構造及び思想の如何を研究したしと云ひたるに依り、次回の夏期に試みるべしと約束したるに依る。」という記述がある (金子堅太郎、「懐旧録」日本大学精神文化研究所『紀要』第 26 集、平成 7 年 3 月、pp.107-08, 130.)。

金子も江戸時代の人情本小説を収集していたアトウッドから『娘節用』の原本を借り、斎藤は『いろは文庫』の原本を譲り受けたのである。

(26) *Mark Twain's Library*, p.277. トウェインは、ヨーロッパ旅行から帰国後の 1880 年代初頭、E.グリーとはニューヨークで日本の工芸品や美術品,書籍を扱う店で出会ったと思われる。

(27) 国会図書館デジタルコレクション、『いろは文庫：正史実伝、第 1 編』、p.5.
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2546523?tocOpened=1 コマ番号 5 (閲覧日 2020 年 1 月 16 日)。

(28) *The Loyal Ronins* (1880), Chapter 1, p. 4 . 宮城教育大学図書館蔵

(29) *The Loyal Ronins* (1880) の表紙と裏表紙 (なお実際の表紙と裏表紙はカラーである)。松村正義『日露戦争 100 年—新しい発見を求めて』成文社 2003 年、p.219。

(30) たとえばグレイの 1885 年 4 月 8 日付の手紙には、*Adventures of Huckleberry Finn* の献本を受け取ったことが記されている。しかもこの手紙には、自分が受けとったものには、トウェイン筆で "Mother

Fairbanks" とあり、この本は彼女に贈るものであったと思われる旨が以下のように書かれている。"But, by some mistake, we have the book addressed by you to 'Mother Fairbanks,' & probably she has ours. Will you please have her address sent me & I will set the things right."（グレイの手稿は MTP に所蔵）

―― 参考図書

アンベール, エメェ. 『絵で見る幕末日本』茂森唯士訳、東京：講談社学術文庫、2004 年.

――――――. 『続・絵で見る幕末日本』高橋邦太郎訳、東京：講談社学術文庫、2006 年.

David, Beverley. *Mark Twain and His Illustrators Volume II (1875-1883)*. New York: Whitston Publishing Company. 2001.

Greey, Edward and Saito, Shuichiro. *The Loyal Ronins*. G.P. Putnam's Sons, 1880.

Gribben, Alan. *Mark Twain's Library: A Reconstruction*. 2vols. Boston: G.K.Hills and Co.1980.

Hirst, Robert H., gen. ed. *Mark Twain's Letters*. 6vols. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press. 1988-2002.

Humbert, Aimé. *Le Japon illustré*. Paris: L.Hachette ＆Cie.1870.

Rasmussen, R. Kent. *Mark Twain A-Z: The Essential Reference to His Life and Writings*, New York: Oxford University Press. 1995.

松村正義. 『日露戦争 100 年―新しい発見を求めて』成文社、2003 年.

Mitford, A.B. *Tales of Old Japan*. 2vols. London: Macmillan and Co. 1871.

Twain, Mark. *A Tramp Abroad*. London: Chatto & Windus. 1906.

――――――. *Roughing It*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press. 1993.

――――――. *Mark Twain's Notebooks & Journals*: Volume II (1877-1883). Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press. 1975.

――――――. *Mark Twain's Travels with Mr. Brown*. New York: Alfred A. Knopf. 1940.